

第1回 AI 社会実装アーキテクチャー検討会 議事概要

令和2年6月30日(火) 13:00-15:00

ガイドラインの方向性に関する討議

- **ガイドラインについて、AI を利用する際のリスクの大きさによってユースケースや利用シーンを切り分けていくが必要になる。**
 - 切り口として、そもそも AI を何に使うものなのか、によって切り分けていくと良いのではないか。AI は利用シーンやユースケースのシリアス度によって、十分な品質か否か、対応する規制が変わること等がある。AI を全てひとくくりに提示するよりは、ユースケースや利用シーンを切り分けていく方が、より実用に足るガイドになりやすい切り口になるのではないか。
 - 産総研のガイドラインではリスクは外部品質で規定できるのではなく、最終品質で規定されるはず。その意味では最終品質が仮定されないと議論が難しいと感じる。
 - 最終的な利用時の品質での安全性は非常に重要である。全体の品質としての安全性のレベルと、コンポーネントに要求されている安全性の担保のレベルは必ずしも一致しないため、コンポーネント安全性を保証するためにそれぞれの部分要素がどの程度安全でなければならないか分析して割り当てていく作業をしていくことになる。あるいは、機械学習のみでは必要な安全性のレベルが出ないため、補助的な安全機構を外部にもう一つ監視システムを作ることや、人が必ず監視に入るといったことも含め、コンポーネントとしても一定の安全性は必要なうえで、さらに全体としてはより高い安全性が必要という形もある。そこでは、コンポーネントと全体の両方に品質レベルがそれぞれ設定されるという理解をしている。
 - リスクの大きさによって切り分けることは概ね賛成である。従来の品質工学でも、FMEA (Failure Mode and Effect Analysis) など様々な考え方があるため、そういったもので見ていくのかと考えている。
- **アウトプットとして、特定の事例・ユースケースを設定したうえでのガイドラインを示すのか、分野横断的な視点で示すのか、検討が必要である。**
 - 用途によってあまり気にならないリスクがある。例えば本をリコメンドされた場合にそのリコメンドが間違っているあまり気にならない。そういった要素ごとに気になるリスクか否かという問題がある。事例ベースではそれらの考え方に幅が出てくると考えている。検討会の目的や方向性は理解できるが、実態の問題はどういうものかとかけ離れずに議論が進められれば良い。
 - 完全に共通すると原則まで上がってしまうため、そこから落とすということはある程度分岐はすると考えている。一方で、綺麗にいくつかのパターンに分かれるイ

メージは湧かない。

- プライバシー・透明性・説明責任・アカウントビリティ・公平性といった点について、ガイドラインでは言及が必要ではないか。同時に、ステークホルダーが誰なのかというものの視点を入れて、ガイドを検討していく必要がある。
 - プライバシーを扱うことは難しい問題なのでまた別かもしれない。アカウントビリティや透明性はよく挙がるが、実際は何なのかよく分からない。EU は Trustworthy AI でアカウントビリティが何かについて日本よりも記載をしている。アカウントビリティの議論は人によって異なることを主張しており、技術者が考えているアカウントビリティと一般の人が考えているアカウントビリティが異なると感じることもよくある。
 - 誰に対してのアカウントビリティなのか、ステークホルダーが誰なのかということの視点を入れて、ガイドを検討していただけるとありがたい。品質の定義やアカウントビリティの目的についても、対象が誰かによって検討のポイントが変わってくると感じているため、その点が整理されれば、よりプラクティカルな内容になっていくのではないかなと考えている。
 - 監査やトラスト、アカウントビリティという概念的な言葉が出てきているが、一般消費者なのか、ビジネス面で使ったうえで一般消費者に渡るという流れなのか、ステークホルダーがどういった分析を行うのか、定義によってはばらけてしまうのではないか。
 - ステークホルダーをある程度具体的にイメージすると、ステークホルダーサイドに責任を持たせること、ステークホルダーサイドでコントロールしなければならないこと、AI の提供サイドで品質として担保すること、という切り分けが明確になっていく。その軸をいれなければガイドラインとして事業者にとって使いやすいものにはならないのではないのではないか。
 - アカウントビリティを toB、toC に対してどう満たすのかという議論は、欧州でスタンダードづくりを含めて活発に行っている。欧州での議論もスコープに入れておくとよい。
 - ヨーロッパがこうやっているという情報は非常に日本にとって参考になると感じる一方で、出発点が似ている点と異なる点、ヨーロッパらしさというものの事例を紹介する際には付随する。構造化する際には留意が必要である。

以上